

# Dear地球民

第三号

1990年4月発行

編集発行 ゆがわら国際交流協会

神奈川県足柄下郡湯河原町土肥1-7-1

湯河原町商工会内

☎ 0465-63-0111

## 国際交流推進事業調査団に 正副会長が参加

去る1月20日から28日までの9日間、湯河原町では国際親善都市提携を目的として、議会、民間、職員8名で米西海岸3都市を調査訪問した。

当協会から伊藤、高橋正副会長が参加、フィルモア市、パームスプリング市、サンファンカピストラノ市の順で訪問し、各市を詳細に視察して回った。それぞれに特徴があり、魅力があったが、調査団全員の意見でサンファンカピストラノ市との姉妹都市提携推進が望ましいとの結論を得た。過去の実績もあり、当協会としても実際の交流面で役割を果たさなければならないと責任重大に感じている。実質的な



活動としては、既に四年間にわたり、ホームステイの経験を積んでおり、迎え方の問題は心配はない。

むしろ、今後アメリカ側から日本訪問を希望しているので、より厚い交流が図られるだろう。従来の実績では、ブラジル、中国、台湾、マレーシャ、タイ、ガーナ、韓国、香港で、アメリカの訪問は今後の受け入れ側として大変歓迎されるだろう。協会側としてはより多くの国からの訪問を期待し、ほんとうの意味での国際化の町として行きたいものだ。



## 冷 汗

今回アメリカ西海岸視察に参加させていただき、皆さんにとっても感謝している。現地を訪れたのは、私にとって3度目であるが、今回もいろいろ楽しい思いをさせてもらい、同時に、冷汗が出るような恥ずかしい思いもいくつか体験した。

その一つが電話である。4年前（1986年）に訪れた時、ホームステイしたバーノフ夫妻に会うために何度か電話を掛ける機会を得た。ロスに到着した最初の夜、ホテルの部屋から電話を入れた。何度ダイヤルしても掛からない。別室にいる畑さんと呼んで掛けてもらったが掛からない。その中、何かの拍子につながった。奥さんのドロシーが電話口に出た。「ハロー。ジス・イズ・イトー・・・」汗びっしょりである。「明日会おう。夕方電話を欲しい。」と、一応デートの約束をした。

翌日、夕食に出掛ける前にホテルから電話を入れた。例により直ぐ掛からず、何度目かにつながったが不在だった。次に食事前に25セントを入れて、レストランの公衆電話から入れた。受話器から何か言っている。分らない。もう一度電話した。また同じ言葉が返って来た。やっぱり分らない。ボーイと呼んで助けを求めた。「もう10セント入れなさい。」やはり相手は不在だった。10時頃ホテルに戻り、部屋から電話した。ドロシーが出て、彼女何事もないように「明夜7時に必ずホテルのフロントに行く。」どうも最初の電話での約束は私の誤解のようだった。

アクシデントがあった。私はレンズを一本紛失した。記憶を辿って行くとパームスプリングス市庁舎で無くしたようだ。完全に諦めていた。全ての行程が終り、帰国当日の朝食の時、ホテルのレストランのスピーカーから「Mrイトー・・・」と呼出しがあった。2度繰返されたが意味が分らない。ボーイに尋ねたら「カウンターに行け。」私に恐怖の電話が掛かっていたのだ。ルイスからだ。「レンズがあったよ。これから空港に届ける。何時の便だ？」私は航空機名と時間を告げた。空港到着後、いつまで待っても現れない。刻々と搭乗時刻は迫る。しまった。また間違えたか。公衆電話に走り、25セントを入れた。また何か言っている。10セント入れた。沈黙。繰返した。結果は同じ。ガイドを呼んで掛けてもらった。この電話、25セントで掛け、一旦受話器を置いて、再度繰返すのだそう。相手は不在だと思っていたら、ドロシーが出たのだ。本当に焦った。しかし「ルイスがとっくに出ていますので、そこらにいるから捜しなさい。」と彼女。JALのカウンター前に彼はいた。

言葉が苦手だと本当に不都合である。アメリカの電話は未だに分らない。その都度、汗びっしょりである。まだいくつか冷汗を掻いたことがあったので、機会があったら、またご披露したい。

（ 伊藤公洋 ）



私のためにご馳走を作ってくれるバーノフ夫妻  
（典型的なアメリカの夫婦共同作業風景）

## 青年よ 大志を抱け

### Boys be ambitious

クラーク博士が残した有名な言葉に「青年よ大志を抱け」と言う言葉があるが、今の青年にはどのような言葉がふさわしいのだろうか？

最近の新聞、雑誌に頻繁に出てくる横文字に「グローバリゼーション（地球化、地球規模とでも訳すのか）」がある。数々の地球規模の問題が討議されている今、日本は「お金儲けに専念して、世界の事を少しも考えていない」と大変な非難を受けている。その為、それらの解決を急ぐため日本でも応分の負担をすべきだとの認識が深まり、日本の海外協力にはも「お金で協力しよう」と言う考え方が先行するような姿勢があった。しかし、今度はその点で非難を受けると矛盾も起きている。

このような問題を現場に出て、肌で感じ認識しようとする青年が我が湯河原町にいた。当湯河原町国際交流協会の副会長の高橋氏の長男である。この息子さんはなかなか愉快的な青年で、将来の日本に望まれる青年の色々なパターンの一つではないかと思わせるものが合った。それは彼の行動に示されているので簡単に紹介しよう。

彼は日本の大学での生活を1年残し、まず中国を知るために1ヶ月間中国を旅行し、見るもの聞くものすべてが学びの対象となり、中国の学生と将来の夢を語り合い、得るものを多く無事に帰国した。次に与えられたチャンスは、南米アマゾンの大自然に新しい企業が進出し、環境破壊がされている実態を調べる団体の一員として参加し、桁違いの広さで目的は十分に果たせたとはいえないながらも地球の環境保全の大切さを体得したことは、他人には真似できないものがあつた筈だ。それらの体験を通じ、世界で通用する言葉は英語であるとの認識を持ち、目下アメリカの大学で勉学中で、予定が終了すれば日本に帰り、大学に戻るとのこと。

激しい受験戦争、就職戦争、そして社会での競争など狭い日本ではこれも運命だと大部分の日本人は納得し、働き蜂だと非難されながらも、これからも頑張るしかない。しかし、どうやら新しい人間も出始めたらしい。それがグローバリゼーションに適合した青年が生まれ次の日本のチャンピオンになるだろう。あまりエリートばかり育成していると非難されるばかりでなく、国の成立が危ない事になりそうだ。

日本の一方的な繁栄に我慢できなくなったクラーク博士が。再び天国から日本にやってきて前言を撤回し、次の言葉を残したそうだ。

Boys don't be ambitious

（青年よ、そんなに大志を持つな）

これはある週刊誌にのっていたアメリカ人のきついジョークでした。

（石井 宏樹）





# 地球民トーク'90

主催 地球民トーク'90実行委員会  
共催 RAN・ゆがわら国際交流協会

スリランカの平和運動家 アリアラトネ博士、日本を代表する原子物理学者河辺教授とともに、地球のこと、未来のこと、地域のこと、みんなで考えてみませんか？

日時 4月21日(土) 午後1:00-

場所 真鶴町民センター3階 真鶴駅から岩海岸方面へ徒歩8分役場下

申し込 Tel 0465-63-0960 高瀬直樹

または 63-0111 湯河原町商工会

☆参加は無料です。



## A. T. アリアラトネ博士

1931年生れ、スリランカの農村開発運動「サルボダヤ運動」代表社会の開発は個人の目覚め(サルボダヤ)からと精神開発を軸に経済の発展を唱え、スリランカでは600万人が運動に参加。

各地でマラリヤ撲滅、井戸掘り、農業開発、教育、貧困の問題などに貢献し、「リトルガンジー」と呼ばれています。

フィリピンのマグサイサイ賞、ベルギーのボードウィン国王賞ほか多数受賞。

博士の話は、私達に勇気と希望、そしてひとりひとりの大切さ、地域の大切さを気付かせてくれます。



## 河辺隆也筑波大学助教授

世界の中でも最先端の技術を有する、筑波大エネルギー研究開発グループのチームリーダー。エネルギー開発では世界の中心的存在。クリーンな次世代エネルギーとして注目の核融合エネルギーの権威者。未来のエネルギーを考えながら21世紀の私達の生活のあり方について示唆に富んだ夢のあるお話をして下さいます。